# *'I am a cat' class* 思い付く事など(5)

Junko Higasa

## ネーミング

どの作家も作中登場人物の名前を考えるのに多少の苦労があるようだ。ネーミングによって作者は何かを暗示することが多いが、場合によっては名前の持つ意味が独り歩きして、作者の意図を超えて思わぬ方向へ話が展開してしまうこともあると聞く。漱石もネーミングには結構気を使った。『吾輩は猫である』の苦沙弥先生こと「珍野苦沙弥」は「狆がクシャミをしたような」面持ちを連想させ「水島寒月」は情緒的な景色を想像させる。「金田富子」はそのまま金持ちの名前。「迷亭」は昔中国で 10 里ごとに建てた宿場を「亭」といったことから建物が頭に浮かび「迷う」は世の中の棲家が一定でないことを想像させるので「独身主義者」というのも頷ける。「八木独仙」からは山羊髭を生やした独善的仙人の風貌が目に浮かぶ。新体詩を作る「越智東風」は「おちこち」と読めるが、この名前は実在した「井上通泰」という新体詩を作る詩人の別名そのものだった。だが漱石はその「井上」という本名は知らなかったらしい。多々良三平は「たたら製鉄」北海道の「三平汁」のイメージで、その字面からは「三平方の定理(ピタゴラスの定理)」が思い浮かぶ。それらの共通項は精神的健康・肉体的健康・金銭的余裕の 3 つの平衡を保つ処世術を心得たバランス人間を思わせる。

さて、主要登場人物の名前については以上のような想像が働いたが、そのほかに私の興味を引いたネーミングがある。それは苦沙弥先生の長女「とん子」と次女「すん子」だ。私はこの二人の名前は何かの単位だという気がして、双方が使われる分野を考えてみたところ物理の単位が思い浮かんだ。「とん＝ton」は質量の単位、「すん＝寸」は国際単位系(SI)以外の尺貫法で分量単位。尺の 1/10 が寸だ。寺田寅彦の説明する物理に理解を示した漱石であるから、ふとそんな方向へ想像を膨らませた。

そしてもう一つ非常に気になるのは、落雲館の生徒との攻防で癇癪を起した苦沙弥先生に精神修養を勧めた八木独仙君の「哲学」によって、精神に異常をきたして巣鴨の病院に入った「立町老梅」君である。苦沙弥先生は「金と衆に従え」と言った鈴木藤十郎君や「催眠術で神経を鎮めなさい」と言った甘木先生ではなく「消極的修養で安心を得ろ」と言った八木独仙君の案を採択して実行した。その結果、わけのわからない手紙をよこした「天道公平」こと「立町老梅」君のことを「訳が分からない＝解脱」のように捉えてありがたがる。ここで八木独仙君の哲学を実行している苦沙弥先生の行く末は「立町老梅＝天道公平」君であろうと考えられる。

私は「立町老梅」という言葉を音で聞いたとき「忽ち狼狽」という言葉がすぐ頭に浮かんだ。長らく町内に立っていた老梅は、維新前の古来日本の精神を持って生きている人間、即ち苦沙弥先生。その種の人間が西洋模倣文明を批判しながら対抗すれば、民衆心理が拍車をかけて追い求める金の力に忽ち狼狽せざるを得ない。その狼狽した精神の方がむしろ正義ではないだろうか？時に使われる「天道孔平」は江戸時代の松江藩士・学者で奇人変人として名高い「天愚孔平」を苦沙弥先生に重ねているようだ。「天道公平」という名前を通して「西洋的文明開化の世の中に日本古来の東洋思想を主張する者は気違い扱いされるが、実はその東洋の思想こそが正しいのだ」ということを漱石は言わんとしているのではないだろうか？そんな風に思う。　(2012.3.18)